
4. ソ連スポーツのペレストロイカについて

唐木 國彦

現在ソ連で進行中のペレストロイカ（立て直し）の波がスポーツの分野にも及んできた。そのことを関係する雑誌論文から紹介する。

1. 「ムヒナの悲劇の教訓」（『今日のソ連邦』1988年9月15日号）

ソ連体操界の女王、エレナ・ムヒナは、モスクワ大会に備えて練習中、事故で再起不能となった。療養中、彼女は自分にとってスポーツとは何であったのか考える。国家のため、金メダルのため、あるいは自分のためなのか。そうした反省の中から「人間の生命は国家の威信に比べれば大して意味を持たず、われわれはそれを子供のときから教えこまれてきた」ことの批判が自覚される。

国策として競技スポーツを推進しているソ連において、しかも政府機関の広報誌にこのような記事が掲載されること自体私たちには驚きである。グラスノスチ（公開）がソ連のスポーツマンにとって人間性を解放するというのであればは好ましいことである。

2. 「金メダルの獲得は何のため」（同上）

著者V. ゲクシンが「われわれは、大衆化は強い選手を生むと常日頃考えてきた。しかし、われわれはオリンピックの頂点に立ったとき、この慣れ親しんだ公式に欠陥のあることを発見した」とのべるとき、そこには、競技力水準の高度化と大衆化とは自動的に結び付かないという反省が示されている。社会主義国の大衆化の実情はどうなっているか。オリンピックの成績から判断できないとすれば、独自の調査が必要になるだろう。

3. 「スポーツはわれわれになぜ必要か」（同上）

オリンピック・チャンピオン、ソ連功労スポーツマスター、ソ連重量挙げ連盟会長。このはなばなしい肩書きを持つユーリ・ウラソフの「ビッグスポーツ」批判である。

スポーツ人口7000万～8000万という数字は「ウソとごまかしの最高の成果」であり、ソ連には大衆的なスポーツ施設、設備が慢性的に不足しているという。他方、オリンピックで獲得した金メダル、欧州選手権、世界選手権の勝利などは、「スポーツの異様な偏向を正当化し、全体としてスポーツの安泰を証明するための見せかけである」と厳しい批判。

「ビッグスポーツ」は、身体の弱い者、上達の遅い者をふるい落とし、児童、青少年に大人の闘争を押しつけ緊張の重圧下におく。「ソビエト社会体制が完全無欠であることの証明としての勝利を、何が何でも勝ち取る競争は、意味づけを要求している」。

4. 「スポーツ選手のギャラの行方は」（APN プレスニュース、1988.8.22）

社会主義国は「能力に応じて働き、能力に応じて受け取る」といわれながら、ソ連のスポーツ選手にはその原則が適用されていない。アイスホッケー、サッカーなど外国チームで活躍する選手や招待選手は何万ドルという金を獲得しているはずだが、選手の手に入らない。「相当な金額が国家スポーツ委員会のおえら方とその随員の渡航費用や、代表団世話役、通訳の報酬として使われている」のが実情だという。これもまたペレストロイカの必要があるということだろう。

5. 「健康への道」（ブラウダ、1988.8.13）

ソ連国家体育・スポーツ委員会議長M.V. グラモフは、このインタビューでソ連のスポーツ施設が不足し、老朽化していることを認めている。また、光熱、水道料の高騰のため施設の使用料が上がっているともいう。また、労働組合所有の施設の有料化と独立採算方式がマイナス効果を及ぼしているという。つまり、ソ連のスポーツ政策の抜本的な改革の必要を責任者自ら示唆しているのである。